

氏名	松永 繁
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 74 号
学位記授与の日付	2021 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	特別養護老人ホームにおける介護福祉職の協働するちからの 熟達化に関する研究 —「他者のフォロー」の学びと実践共同体—
論文審査委員	審査委員長 齊藤 くるみ（副指導教員） 審査委員 田村 真広（主指導教員） 審査委員 壬生 尚美 審査委員 下垣 光 審査委員 潮谷 有二

題目：特別養護老人ホームにおける介護福祉職の協働するちからの熟達化に関する研究

—「他者のフォロー」の学びと実践共同体—

氏名：松永 繁 Shigeru Matsunaga

要旨：

本研究では、特別養護老人ホームで介護に従事する協働するちからに課題を持つ介護福祉職の協働するちからの学習、熟達化をテーマに、介護福祉士養成課程を持つ専門学校で学ぶ協働するちからに課題を持つ者に焦点を当て、養成校・就労後という一連の過程をとおし、て協働するちからの学習と熟達化について検討することを目的とした。

まず、先行研究から介護現場において「協働」に関する課題の存在が示唆され、その要因として、介護福祉職の「協働するちから」の存在を述べた。次に、介護福祉士養成課程を持つ専門学校で学ぶ学生の「協働するちから」について、教員を対象としたアンケートによる量的調査及びインタビューによる質的調査から、学生の「協働するちから」の課題と学び、教員の支援について考察した。結果、「協働するちから」に課題を持つ学生の存在が示唆され、教員は学生に対して、経験の省察をとおして認識枠組みの変容と行動の修正を目的とした支援を行っていた。そして、学生は、課題を抱えながらも支援を受けながら協働するちからの学びを進めながら卒業を果たし、介護現場へ移行していた。よって、経験学習に基づいた「協働するちから」の学習の可能性が示唆された。次に、学生の介護現場へ移行後の課題に関して示唆を得ることを目的として、特別養護老人ホームにおいて、協働するちからに課題を持つ介護福祉職の特徴について検討した。結果、4つの特徴が示唆された。また、協働するちからに課題を持つ介護福祉職は、課題を抱えながらも、自身の協働するちからの強み

の部分を活かしながら、仕事を継続し、協働するちからの学びを行っていることも示唆された。

次に、特別養護老人ホームで介護に従事する介護福祉職の学びの内容とプロセスについて検討した。結果、介護福祉職は、互惠性規範・互惠的關係性を重視した介護福祉職が実践共同体を形成し、「他者のフォロー」の実践を行っていることが示唆された。そして、実践共同体をとおして協働するちからの熟達化につながるパースペクティブの変容・意味スキームの形成、他者のフォローに関する実践知の獲得という変容的学習を行っていることが示唆された。

結論として、協働するちからの学習過程では、時間軸に沿って熟達する過程と、一旦停止、留まり、退行といった過程を織り交ぜながら螺旋形の学習過程を歩むという協働するちからの熟達化の過程を示した。

そして、介護福祉士養成課程を持つ専門学校で学ぶ協働するちからに課題を持つ者は、学校生活・介護現場において課題を抱えながらも螺旋形に協働するちからの熟達化を行っていく過程を示した。

A study on the proficiency of the collaborative ability of care workers in nursing homes

-Learning of following others and community of practice-

Shigeru Matsunaga

The purpose of this study is to obtain suggestions for proficiency in collaborative ability. In this study, we focused on students studying at a vocational school with a training course for care workers, and examined the challenges and acquisitions of collaborative ability during their school years and after employment.

First, we found that there are some issues in the relation between "collaboration" in nursing homes for the elderly and the collaborative ability of nursing care workers, by studying from previous studies.

Next, we conducted both the quantitative survey and the qualitative interview of teachers at a vocational college that has a course of care worker. We considered that the present situations, issues, a way of learning of the "ability to collaborate" of the students, and the supports of the teachers. As a result, the existence and characteristics of developing students in the "collaborative ability" were suggested. We also found that there might be a possibility for teachers to provide their supports based on the experience-learning theory for a purpose of recognizing by reviewing experiences, and for correcting behaviors by changing the cognitive framework.

We found the students with those issues; however, press forwarded by learning and obtaining the collaborative ability and successfully graduated and found employment in their field.

Therefore, it was suggested that there is possibility of that "Collaboration ability" may be learned

based on experiential learning.

We found another suggestion from this study that after students found works at nursing homes they would tend to have difficulty in collaborative ability; but, they kept working by learning the collaborative ability by taking advantage of their own strengths although they had issues in the ability.

As the result, it was suggested that care workers attached importance to the reciprocity norm and reciprocal relationship of "supporting each other", and those care workers who are interested form a community of practice. It was also suggested that they are conducting transformational learning, such as forming perspective transformation, as semantic schemes that lead to proficiency in the collaborative ability through a community of practice, and as learning and acquiring practical knowledge regarding the follow-up of others.

In conclusion, two patterns were suggested in the learning process of collaborative ability. The first is the case of improving along the time scale, and the second is the case of learning spirally and mastering while interweaving actions such as "pause", "stay", and "regression". It was suggested that although some students may have difficulties in learning collaborative ability in their school lives and nursing care fields, they would carry out learning in a spiral that leads to proficiency in collaborative ability.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	斉藤 くるみ	手話言語学、脳神経言語学、障害学
審査委員	田村 真広	学校カリキュラムの歴史と理論、福祉教育論
審査委員	壬生 尚美	介護老人福祉施設におけるケアの変遷
審査委員	下垣 光	認知症高齢者の支援
審査委員	潮谷 有二	福祉サービス供給論、福祉人材政策

2020年10月30日までに提出された博士論文を審査委員がそれぞれ精読し、11月28日に公開口述試験を行った。2021年2月18日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会の結果報告を受け、博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの提案がなされ、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2021年3月19日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2 博士論文・最終試験の評価

<総合評価>

我が国の介護福祉現場には多様な背景を持った介護福祉職が存在している。介護福祉士の資格取得ルートの複線性はもちろんのことだが、政策として在留資格を拡張し東アジアを中心とした人材にまで介護福祉職としての入職を推進してきたことの帰結として今日の多様性がある。申請論文は、介護福祉職の多様な背景を見据えて、介護現場での協働のちからの熟達化の道筋を描き出している。

前半は、専門学校の教員へのアンケート調査をもとに、協働するちからに課題を持つ学生のどこに問題があるのかと、その支援について検討し、そのアンケートの結果を踏まえて教員ヘインタビューを行っている。後半はそのような課題をもつ人が特別養護老人ホームで介護に従事する中で、実践共同体を通じた変容的学習により協働するちからを習得することを見出し、最後に協働するちからの熟達化の過程の検討を行っている。

本論文は課程博士論文の水準に達しており、なおかつ独自性と卓抜さを以下の3点に見いだすことができる。第1には、介護福祉職に「協働するちから」を熟達化させる実践共同体として特別養護老人ホームをとらえ直した点である。実践共同体としての特別養護老人ホームは領域、コミュニティ、実践によって構造化されているとする。

第2には、「協働するちから」を実践共同体において発揮される「他者のフォロー」へと焦点化・具現化できたことである。「他者のフォロー」に関する学習のプロセスの考察において、他者との協力に関する意味パースペクティブと意味スキームの枠組みを析出した点は白眉である。申請者は、変容的学習によってパースペクティブとスキームが「他者のフォロー」へと変容したことをもって熟達化プロセスを把握している。同僚の立場に立った行動、同僚を大切にしたい振る舞い、間接業務を率先

して行う、段取りが組めることは、いずれも介護福祉職の業務遂行において得心のいく内容である。

第三には、介護福祉職の協働するちからの螺旋熟達化学習プロセスを示唆できたことである。申請論文では十分になしえなかった介護福祉士養成機関である専門学校を就労以前の実践共同体としてとらえ直し、再組織する可能性を開いたといえる。

論述の仕方として、もう少し先行研究や代表的理論に言及しながら論を展開するほうがよい、施設特性に踏み込んで対象の選び方の根拠を明確にしたほうがよい等、研究者として未熟な部分もあるが、今後さらに研鑽を積むことを期待する。

【審査項目】

【1. 研究目的の明確さと重要性】

研究目的は明確であり社会的にも重要である。付け加えるとすれば、ヒューマンサービス従事者に求められるコンピテンシーや教育方法等の研究は数多くなされているものの、能力のとらえ方に難点があるために現実的な養成課題に結びつかない研究が少なくない。そうした中であって介護福祉職が介護実践を通して「協働するちから」を発達させていく様相を把握した申請論文は貴重な成果を示しているといつてよい。

能力と称しつつ「目標」と区別がつかない項目をあたかも無い物ねだりのように列挙する傾向が見られ、学習者の面前にコンピテンシーが脅迫的に屹立するかのごとく能力を定義する研究が少なくない。申請論文の「協働するちから」については、当初は OECD が提唱した社会情動的能力の定義を根拠にしていたが大きく修正・進化した。申請論文が「協働するちから」をパースペクティブとスキームに具現化した点は大きな貢献である。

【2. 研究方法、分析方法、論述の適切さ、倫理的配慮】

指摘事項を真摯に受け止め、遂行を重ねることによって、説得力のある適切な論述に改善されたことを評価したい。評者は、申請論文の構造を次のようにとらえている。

第 1, 2 章は、助走期間である介護福祉士養成校において露見した介護福祉職の課題（いわば「種子」）を究明する章である。そして第 3, 4 章は、引き継がれた課題を特別養護老人ホームにおいて実践共同体の一員となった介護福祉職が熟達を遂げていく様相を把握した章である。序章と終章を見れば明らかなように、特別養護老人ホームをいわば苗床にして熟達を遂げていく実践共同体の構築が本論文の肝になっている。

以上から主題・副題にふさわしい論文構成になっていると判断される。

限界・課題としては、調査対象者数の少なさと対象設定の理由・根拠があげられる。第 1 章では 25 校の養成校教員へのアンケート、第 2 章では 6 名の教員、第 3・4 章では 6 名の介護福祉職へのインタビューにとどまっている。継続研究においては、対象設定の理由・根拠を明確にしつつ研究課題を絞るよう求めたい。

【3. 研究結果のオリジナリティと社会的意義】

研究結果のオリジナリティと社会的意義は総合評価に述べたとおりである。

あえて付け加えるとすれば、第 1・2 章において、発達途上の学生のレジリエンスについて記述されたことである。今にも退学しそうな学生への熟練教師によるサポート的指導こそが修学継続へと学

生を導いている。専門学校の教員は、学生のレジリエンスを発動させるべく、学生の強みや周囲の環境に働きかけている。学生指導における「関係性の構築」、「考えさせる指導」、「保護者との連携」、「成長へのコーディネート」、「指導者との関係性構築」として抜粋された記述からそれらを読み取ることができる。レジリエンスを導き発動させる教員のいる学校は実践共同体としてとらえ直すことが可能であろう。

「螺旋熟達化学習プロセス」について、詳しい解説が追加された。熟達化における「寄り道」「退行」「一旦停止」といった発達上の特性を析出できた点を評価したい。

今後の課題として、インフォーマルな学習への視野を持って調査を進められたい。